

美少女になりたい——それはダメ人間だけでなく、男なら少なからず誰もが持つ願望ではなからうか。

美少女とは、おっさんからもっとも遠く、故に理解不能で、だからこそ憧れる存在。

そんな美少女を二頭身にデフォルメすることによって、より可愛く、エロスとは真逆の方向に際立たせたい——

これは、そんな願望を拗こじらせてしまった、ちよっぴりダメ人間の、愛とか勇氣とか、なんかそんな感じの壮大な気がしないでもない、別にどうでもいいお話である。

新番組『二頭身美少女にあこがれて』、ハジマリマス。

18 戦目

二頭身美少女にあこがれて

私の名前は高千穂ツバキ。

地元のゾイエス学園に通っている、普通の小学五年生です。

……既視感^{デジャブ}だろうか。たしか去年の今頃も五年生だったので、今年は六年生に進級しているはず。ただの勘違いか、なにか大きな力が働いているのか――

深く考えるのはやめよう。現実逃避してみても、目の前の光景からは逃げられないのだから。

「……紅桜^{べにお}、貴女^{あなた}が抱えているものがなにか、もう一度教^{おし}えてもらえますか？」

目の前にいる紅い髪^{あか}の少女に問いかける。

彼女の名前は紅桜。青いメイド服を着ていて、外見は九歳くらい。此処^{ここ}――『きよくちせん屋』の従業員で、アンドロイドらしい。

「承認^{アクセプト}。これは〈管理人〉です」

アンドロイドらしい機械的な口調で答える紅桜。ほんの一分前の光景となにも変わらな
い。

「ツバピよん、どんなに現実が残酷でも、受け入れなきゃ」

紅桜が抱えている『なにか』が、そう宣^{のたま}った。

順を追って話そう。〈管理人〉に呼び出されて来ると、店内に客の姿はなく、紅桜がぼつんと一人座っていた――『なにか』を抱えて。それは小さな女の子が大きめのぬいぐるみを背中から抱きしめているようで、多少あざといが微笑^{ほほえ}ましく感じられた。だが、それも彼女の正面の席に着くまでのこと。ぬいぐるみらしきものには見覚えがあり、誰かを横している^おとしか思えなかった。

そう――〈管理人〉だ。

この『きよくちせん屋』のオーナーであり、私達の雇い主。この場を訪れる際は猫耳が付いたフードを被^{かぶ}り、少女の姿で現れるが……男性である。しかも今日は初めて見る姿で、二頭身ほどにデフォルメされていた。

「あの、マイスター――」

「この姿の時は『キョウシユウちゃん』と呼んでくれたまえ。二度は言わないゾ☆」

仕方なく『なにか』改め〈管理人〉に声をかけると、そんな返事で遮^{おさえ}られた。軽くイラつとする。

「……………今日はどういったご要件ですか？」

その姿はなんだとか、どうしてぬいぐるみよろしく紅桜に抱えられているのかとか、もうどうでもいい。

「ちよっと、なにめんばくさくくなってんのよ。あるでしょ、訊^ききたい事！」

「紅い髪の少女に抱きかかえられたまま、ふんすかといった様子で〈管理人〉が言う。面倒くさがっていると判るなら察してほしい。」

「……その姿はどうしたんです？」

仕方なく、一応は気になった質問をする。こういう時は抵抗しない方が早く解放されると知っている。

「可愛かる？」

そう言っつて小首を傾げる〈管理人〉。あざとくイラつとする。

「……どうして、紅桜べにおに抱きかかえられているんです？」

「ちっちゃい子が大きいぬいぐるみを抱いてるのって可愛いじゃない。相乗効果であたしも更に可愛く見えて一石二鳥という極めて高度な戦略だよ、きみい」

どうでもよくてイラつとする。口調が更にイラつとする。

「……………で、要件は」

「ノルマなの！？ なにそのノー・ガード戦法。適当に付き合っつれば解放される的な。よくないと思う、そういうの。端的に言っつと——もつと構っつて」

「……………」

疲れる。どうして私はこんな罰を受けているのだろう。知らない間に、どんな罪を犯したというのだろう。教えて欲しい。

「キョウシュウちゃん、ツバキの心が折れそうです」

必要最低限の受け答えしかしない紅桜が助け舟を出してくれた。そんなに今の自分は疲弊ひへいして見えるのだろうか。

「えー。いやさあ、この店もリニューアルして十周年だから、なにか考えなきゃっつて相談したかったんだけど」

「あ、そういえばそうですね。もうそんなになりますか……」

店の有様が現状を物語っつているが、それでも十年経つたというのはそれなりにすごい事だと思っつ。

「でも、なんにもないから、どうやっつてお茶を濁にごせばいいかなっつて相談をね」

「……お茶を濁すの前提なんです」

「あたしだっつて大々的に何かやりたいわよ。『小説の新シリーズ始めます』とか言っつたいわよ。でも、まだ創作意欲がそこまで湧わかなくて……」

〈管理人〉——もとい、キョウシュウちゃんの声の調子トーンが下がつた。始めたい気持ちはあるらしい。

「とりあえず、ホームページのリニューアルだけして、年内に何か始められればいい。多



分、始める。始めるんじゃないかな。ま、ちよつと覚悟はしておけ」

日和ひよつたキョウシュウちゃんに、どれくらい元ネタが通じるだろうという視線を送る。

「それはそれとして——さあ、ツバぴよんも」

紅桜べにおに抱きかかえられているキョウシュウちゃんが、こちらに両手を広げる。今更だが、

『ツバぴよん』というのは私のことだ。

「さあ、とはっ。」

「抱っ。」

「……………」

紅桜が『どうぞ』と言わんばかりに、二頭身になった〈管理人〉を差し出してくる。

抱っこしたのかどうかはご想像にお任せします。

Mission complete

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』十八戦目をお届け致します。

ぶさたご無沙汰しています。挿絵になっていますが、イラストを描くのも一年ぶりなら、小説―
―シヨートですが―を書くのも一年ぶりです。創作活動についてはかなり放置気味ですが、それでも一応は活動拠点なので、ホームページはこの機会にリニューアルしたいと思
い、それぞれ用意しました。二頭身のキョウシュウちゃん、普通に可愛いと思うのですが
いかが如何でしょうか？ まあ、僕だと思うと可愛く思えないかもしれませんが。

今回もツバキ視点で、キョウシュウちゃん二度目の登場でした。ちっちゃい子と大きめ
のぬいぐるみの組み合わせはテッパンですね。『まほあこ』のネロアリス然り！
しか

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

十一年目がどうなるか、それは誰にも判らない――